



TITLE:

S. Shelahの結果について (Boole代数値の解析学と超準解析)

AUTHOR(S):

金井, 康雄

CITATION:

金井, 康雄. S. Shelahの結果について (Boole代数値の解析学と超準解析). 数理解析研究所講究録 1981, 441: 27-42

ISSUE DATE:

1981-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/102835>

RIGHT:

S. Shelah の結果について

金井 康雄

1 序

G. Cantor は 2^{\aleph_0} の濃度がどれくらいなのか最初に考えた集合論の創始者である。この問題—連続体問題—に関して彼が得た結果は $2^{\aleph_0} > \aleph_1$ だけであるが、このことより $2^{\aleph_0} = \aleph_1$ を主張する連続体仮説 (C.H.) を提起した。

1905 年, J. König は前述の Cantor の結果を導く定理を得た。

定理 1 $\{k_i\}_{i \in I}$ と $\{\lambda_i\}_{i \in I}$ を二つの同じ集合によって添数づけられた基数からなる集合とする。このとき、任意の $i \in I$ に対し、 $k_i < \lambda_i$ が成立すれば、

$$\sum_{i \in I} k_i < \prod_{i \in I} \lambda_i \quad \text{が成り立つ。}$$

系 1 任意の順序数 α, β に対し、 $\aleph_\beta < \text{cf.}(\aleph_\alpha^{\aleph_\beta})$ が成立する。

系 2 任意の無限基数 k に対し、 $k < k^{\text{cf.}(k)}$ が成立する。

1930年のK. Gödelの結果—不完全性定理—は連続体仮説に少なからず影響を与え、この仮説が成立するかどうか通常の集合論の公理から決定できないのではないかという疑いが生じ始めた。

この疑いは次の二つの定理によって真実となった。

定理2 (K. Gödel) 公理体系ZFが無矛盾ならば、公理体系 $ZF + G.C.H.$ も無矛盾である。

定理3 (P. Cohen) 公理体系ZFが無矛盾ならば、公理体系 $ZF + \neg C.H.$ あるいは $ZFC + 2^{\aleph_0} \geq \aleph_2$ も無矛盾である。

系 公理体系ZFが無矛盾ならば、連続体仮説は公理体系ZFCにおいて非決定である。

P. Cohenの結果が得られて間もなく、R. M. Solovayは次のことを示した。

定理4 公理体系ZFが無矛盾ならば、公理体系 $ZFC + 2^{\aleph_0} = \aleph_\alpha$ も無矛盾である。ここで、 α は $cf(\aleph_\alpha) > \aleph_0$ を満たす任意の順序数である。

さらに、W. B. Eastonは上の結果を拡張して次の定理を得た。

定理5 公理体系 $ZFC + G.C.H.$ のもとで、 F を次の条件を満たす、すべての正則基数 κ にある基数を対応させる関数とする

る:

- (a) F は非減少関数である;
- (b) すべての正則基数 κ に対し, $\kappa < cf.(F(\kappa))$ が成り立つ。

この時, すべての正則基数 κ に対し $2^\kappa = F(\kappa)$ が成り立ち, 基数や共終性がすべて保存される Cohen 拡大が存在する。

この Easton の方法では特異基数に対する連続体問題は扱えない(, しかし, 彼の model において, 特異基数 κ に対するべき集合 $\mathcal{P}(\kappa)$ の濃度は, 正則基数のそれらによって完全に決定される)ので, この後, この問題は「特異基数問題」と呼ばれるようになった。

Easton の結果が出て間もなく, Bukovsky と Hechler は互いに独立して次のことを証明した。

定理 6 κ を特異基数, $\lambda < \kappa$ をすべての $\lambda \leq \mu \leq \kappa$ を満たす基数 μ に対し $2^\mu = 2^\lambda$ が成り立つような基数とするとき, $2^\kappa = 2^\lambda$ が成り立つ。

そして, 最近, J. Silver は次の驚嘆すべき事実を提示した。

定理 7 任意の ω_1 より小さい順序数 α に対して $2^{\aleph_\alpha} = \aleph_{\alpha+1}$ が成り立てば, $2^{\aleph_{\omega_1}} = \aleph_{\omega_1+1}$ が成り立つ。

この Silver の結果は F. Galvin と A. Hajnal によって,

次のように一般化された。

定理 8 κ と λ を次のような非可算正則基数とする, 即ち, すべての基数 $\mu < \lambda$ に対し, $\mu^{\kappa} < \lambda$ が成り立つ。

さらに, $\langle \kappa_{\alpha} : \alpha < \kappa \rangle$ を基数の列で, すべての順序数 $\alpha < \kappa$ に対し, $\prod_{\beta < \alpha} \kappa_{\beta} < \aleph_{\lambda}$ が成り立っているものとする。このとき, $\prod_{\alpha < \kappa} \kappa_{\alpha} < \aleph_{\lambda}$ が成り立つ。

系 1 ξ を $\text{cf}(\xi) > \aleph_0$ なる順序数とし, 任意の順序数 $\alpha < \xi$ 及び任意の基数 $\lambda < \text{cf}(\xi)$ に対し, $\aleph_{\alpha}^{\lambda} < \aleph_{(\aleph_1 \text{cf}(\xi))^+}$ が成り立っているならば, $\aleph_{\xi}^{\text{cf}(\xi)} < \aleph_{(\aleph_1 \text{cf}(\xi))^+}$ が成り立つ。

系 2 ξ を $\text{cf}(\xi) > \aleph_0$ なる順序数とし, 任意の順序数 $\alpha < \xi$ に対し $2^{\aleph_{\alpha}} < \aleph_{(\aleph_1 \text{cf}(\xi))^+}$ が成り立っているならば, $2^{\aleph_{\xi}} < \aleph_{(\aleph_1 \text{cf}(\xi))^+}$ が成り立つ。

強極限基数 \aleph_{α} のべき集合の濃度 $2^{\aleph_{\alpha}}$ の取り得る限度に関して, S. Shelah は次の三つの問題を設定した。

(α) $\text{cf}(\alpha) = \aleph_0$ なる時, 何か結果を得ることが出来るか。

(β) $\|\bar{\alpha}\|_{D(st)}$ あるいは $2^{\aleph_{\alpha}}$ の取り得る限度をより制限することが出来るか。

(γ) $\alpha = \aleph_{\alpha}$ かつ $\text{cf}(\alpha) = \aleph_1$ を満たす最小の α に対し何か証明することが出来るか。

ここで, $D(st)$ は the filter of closed unbounded sets

を表し, $f \in {}^{cf(\omega)}\text{Ord}$ に対し, $\|f\|_{D(st)}$ は f の $D(st)$ による rank, 即ち, 任意の $g <_{D(st)} f$ なる g に対し, $\|g\|_{D(st)} < \beta$ なる最小の β , を表す。また, \aleph は値が \aleph だけである $cf(\aleph)$ 上の定関数を表す。

上記問題のうち, (β) に対して, 彼自身次の結果を得ている。
 : もし $|\alpha| = \beth_\omega$ ならば $\|\alpha\|_{D(st)} < (\beth_\omega)^+$ である。

また, ごく最近, Shelah は問題 (α) に対してある結果を得た。この結果の紹介がこの報告の主たる内容であり, 続く section で述べられる事柄である。

R. Jensen は次に述べる概念の重要性を最初に指摘した set theorist である。

今, $M \prec N$ を $M \subseteq N$ なる二つの ZFC の inner model とする。このとき, 次の事柄が満たされれば, M に関して N は covering property を持つといわれる。その事柄とは, M は N における definable class である。また, ‘ X は順序数からなる非可算集合である’ ということが model N で成り立てば, M の要素で, $X \subseteq Y$ を満たしかつ N で ‘ X と Y は同じ濃度をもつ’ ということを成り立たせる Y が存在するといふことである。

次の定理は, この性質と特異基数問題とが如何に関連しているかを物語っている。

定理9 N を ZFC の inner model, M を $M \subseteq N$ なる ZFC+G.C.H の inner model とし, かつ N は M に関して covering property を持つとする。このとき次のことが model N において成り立つ。即ち, k が特異基数ならば, k のべき集合 $\mathcal{P}(k)$ の濃度は, $\lambda \geq \sup\{2^{\aleph \alpha} : \alpha < k\}$ かつ $\text{cf.}(\lambda) > k$ を満たす最小の基数 λ である。

このように, ある ZFC+G.C.H の inner model に関して, universe V が covering property を持てば, 特異基数問題が解決されるということが理解される。

以上, 特異基数問題についての歴史を sketch したが, 次に述べる S. Shelah の結果の位置付けに役立ては幸いと思う。

2. S. Shelah の定理と証明

S. Shelah が最近得た結果とは, 次に行く定理である。

定理10 \aleph_ω が強極限基数ならば, $2^{\aleph_\omega} < \aleph_{(2^{\aleph_0})+}$ である。

以下, この定理の証明の sketch を試みるが, その前に記号法及び基本的概念の説明をすることにする。

(1) ω Ord でもって ω 上の順序数値関数全体からなる class を表す。

(2) D を ω 上の非単項超filter とする。このとき, \equiv によって次のような ${}^\omega\text{Ord}$ 上の同値関係を表す:

$f, g \in {}^\omega\text{Ord}$ に対し,

$$f \equiv g \quad \text{iff} \quad \{n < \omega : f(n) = g(n)\} \in D.$$

また, \leq によって次のような ${}^\omega\text{Ord}$ 上の二項関係を表す:

$f, g \in {}^\omega\text{Ord}$ に対し,

$$f \leq g \quad \text{iff} \quad \{n < \omega : f(n) \leq g(n)\} \in D.$$

そして, $f \leq g$ は次の事柄の略記と考える:

$$f \leq g \quad \text{and} \quad f \neq g.$$

このとき, 次のことが成立する。

- ① $f \equiv g$ ならば $f \leq g$;
- ② $f \leq g$ かつ $g \leq f$ ならば $f \equiv g$;
- ③ $f \leq g$ かつ $g \leq h$ ならば $f \leq h$.

各 $f \in {}^\omega\text{Ord}$ に対し,

$$[f]_D = \{g \in {}^\omega\text{Ord} : f \equiv g \text{ かつ } (\forall h \in {}^\omega\text{Ord}) (h \equiv f \text{ ならば } \text{rank}(g) \leq \text{rank}(h))\}$$

とおく。そして A を ${}^\omega\text{Ord}$ の部分class あるいは部分集合とすると, A/D で class あるいは集合である

$\{[f]_D : f \in A\}$ を表すことにする。

最後に,

- ④ $f \equiv g$ かつ $f \leq h$ ならば $g \leq h$; と

⑤ $f \equiv g$ かつ $h \leq f$ ならば $h \leq g$:
 が成立するので, A/D 上の二項関係 \leq_D を
 $[f]_D \leq_D [g]_D \iff f \leq_D g$ によって定義すること
 が出来る。

(3) A を ${}^\omega\text{Ord}$ の部分集合とすると, $\text{cf.}(A/D)$ であ
 る次の条件を満たす最小の基数 λ を表す:

長さ λ の A における列 $\langle g_\alpha : \alpha < \lambda \rangle$ がとれて,
 $(\forall f \in A)(\exists \alpha < \lambda) f <_D g_\alpha$ を満たしている。

(4) A の部分集合 \mathcal{F} が $(\forall g \in A)(\exists f \in \mathcal{F})(\forall n < \omega) g(n) \leq f(n)$
 を満たせば, \mathcal{F} は A の covering であると言われる。

(5) \mathcal{M} であって次のような構造 $\langle \aleph_\omega, \in, h \rangle$ を示す:

① $h: \aleph_\omega \times \aleph_\omega \rightarrow \aleph_\omega$;

② $\omega \leq \alpha < \aleph_\omega$ なる任意の順序数 α に対し, 関数

$h^\alpha: \beta \mapsto h(\alpha, \beta)$ は $h^\alpha[|\alpha|] = \{h^\alpha(\beta) : \beta < |\alpha|\} = \alpha+1$
 を満たす。このような構造が存在するのは明らかである。

(6) \mathcal{A} を \mathcal{M} の任意の初等的部分構造とする。このとき,
 次の条件を \mathcal{A} が満たしたならば \mathcal{A} は good であると言うこと
 にする。その条件とは; $\mathcal{A} = \langle A, \in, h_A \rangle$ とするとき,

① $\omega \subseteq A$;

② 任意の $n < \omega$ に対し, $A \cap \aleph_{n+1}$ の順序型は, 非可算
 な共終性をもつ極限順序数である。また, $A \cap \aleph_{n+1}$ は

$\chi_\alpha(n+1) = \sup.(A \cap \aleph_{n+1})$ における closed unbounded set を含む。ここで、 χ_α は α に依存した ω から \aleph_ω への関数で $\chi_\alpha(n) = \sup.(A \cap \aleph_n)$ ($n < \omega$) で定義されるものである。

(iv) A を集合、 λ を基数とするとき、次の二つの集合を定義する。

- ① $[A]^\lambda = \{B \subseteq A : |B| = \lambda\}$;
- ② $[A]^{<\lambda} = \{B \subseteq A : |B| < \lambda\}$.

さて証明にとりかかるとする。

まず、次のことが証明される。

Claim 1 濃度が $\aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ 以下である $\prod_{n < \omega} \aleph_n$ の covering 冪が存在する。

Claim 1 の証明

$\omega^* = \{D \subseteq \mathcal{P}(\omega) : D \text{ は } \omega \text{ 上の非単項超filter である}\}$ とおくと、各 $D \in \omega^*$ に対し、 $\prod_{n < \omega} \aleph_n$ の部分集合 $\mathcal{A}_D = \{g_\alpha : \alpha < \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}\}$ で $(\forall f \in \prod_{n < \omega} \aleph_n)(\exists \alpha < \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}) f <_D g_\alpha$ を満たすものがとれる。このことは次の命題(証明は省略する)より導かれる。

命題 1 $<_D$ に関して単調減少である長さ $(2^{\aleph_0})^+$ の列も ω Ord において見つかることは出来ない。

命題2 ${}^\omega\text{Ord}$ における長さ λ が 2^{\aleph_0} より大きく, \leq_D に関して単調増加である列 $\langle f_\alpha: \alpha < \lambda \rangle$ に対して, 集合 $\{[f_\alpha]_D: \alpha < \lambda\}$ は \leq_D に関して最小上界をもつ。

命題3 $\text{cf.}(\prod_{n < \omega} \aleph_n / D) < \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$.

ここで, D は ω 上の任意の非単項超filterであるとする。

(例えば, 命題1の証明には, Erdős-Rado の定理 $(2^{\aleph_0})^+ \rightarrow (\aleph_1)_{\aleph_0}^2$ より得られる, $(2^{\aleph_0})^+ \rightarrow (\aleph_0)_{\aleph_0}^2$ を用いる。

次に, $\mathcal{G} = \bigcup_{D \in \omega^*} \mathcal{A}_D$ とおくと, $|\omega^*| \leq 2^{2^{\aleph_0}} < \aleph_\omega$ より $|\mathcal{G}| \leq \aleph_\omega \cdot \aleph_{(2^{\aleph_0})^+} = \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ となる。

ここで, \mathcal{F} を次の性質をもつ $\prod_{n < \omega} \aleph_n$ の部分集合で (包含関係に関して) 最小のものとする, \mathcal{F} が求めている covering となる。その性質とは,

- ① $\mathcal{G} \subseteq \mathcal{F}$ かつ $|\mathcal{F}| \leq \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$;
- ② $(\forall \mathcal{A} \in [\mathcal{F}]^{<\aleph_0}) \sup. \mathcal{A} \in \mathcal{F}$, ここで $\sup. \mathcal{A}$ とは $(\sup. \mathcal{A})(n) = \sup. \{f(n): f \in \mathcal{A}\}$ ($n < \omega$) で定義される $\prod_{n < \omega} \aleph_n$ の要素である;
- ③ $(\forall f \in \mathcal{F})(\forall g \in \prod_{n < \omega} \aleph_n) (|\{n < \omega: f(n) \neq g(n)\}| < \aleph_0 \text{ ならば } g \in \mathcal{F})$;

の3つである。

\mathcal{F} が covering であることを証明するために, \mathcal{G} を $\prod_{n < \omega} \aleph_n$ の任意の要素とし, ある $f \in \mathcal{F}$ に対し, $(\forall n < \omega) g(n) \leq f(n)$ と

なっていることを示す。

今, $(*) \dots (\exists h \in \mathcal{F}) \mid \{n < \omega : h(n) < g(n)\} \mid < \aleph_0$. なる命題を考え, この命題を証明するために, 否定をとって矛盾を導くことにする. $(*)$ の否定は,

$(\forall h \in \mathcal{F}) \mid A_h \mid = \aleph_0$. となる. ここで,

$A_h = \{n < \omega : h(n) < g(n)\}$ である.

ある異なる \mathcal{F} の要素 h_1, h_2 に対し, $A_{h_1} \cap A_{h_2} \in [\omega]^{<\aleph_0}$ と仮定すると, 明らかに $\mid A_{\sup\{h_1, h_2\}} \mid \leq \mid A_{h_1} \cap A_{h_2} \mid < \aleph_0$. となり, \mathcal{F} の性質②より $\sup\{h_1, h_2\} \in \mathcal{F}$ となり, $(*)$ の否定に反する. 従って, $(\forall h_1, h_2 \in \mathcal{F}) (h_1 \neq h_2 \text{ ならば } \mid A_{h_1} \cap A_{h_2} \mid = \aleph_0)$ が示されたこととなり, 集合 $\mathcal{A} = \{A_h : h \in \mathcal{F}\}$ は有限交又性を持つことがわかる. また, \mathcal{F} の性質③より $\bigcap \mathcal{A} = \emptyset$ である. D_0 を \mathcal{A} より生成された非単項 filter を含む, 非単項超 filter であるとする. このとき, \mathcal{A}_{D_0} の性質より, ある $\alpha < \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ に対し $g \prec_{D_0} g_\alpha^D$ となる. しかし, 一方 $g_\alpha^D \in \mathcal{G} \subseteq \mathcal{F}$ なるので, $A_{g_\alpha^D} \in \mathcal{A} \subseteq D_0$ となり, $g_\alpha^D \prec_{D_0} g$ が得られる. これは矛盾である.

従って, $(*)$ が成立し, ある $h \in \mathcal{F}$ に対し $\mid A_h \mid < \aleph_0$ となっている. $\prod_{n < \omega} \aleph_n$ の要素 f を次のように定める;

$$f(n) = \begin{cases} h(n) & \text{if } n \in \omega - A_h \\ g(n) & \text{if } n \in A_h. \end{cases}$$

明らかに, $(\forall n < \omega) g(n) \leq f(n)$ が成り立ち,

$|\{n < \omega : h(n) \neq f(n)\}| < \aleph$. だから $f \in \mathcal{F}$ となる.

以上で Claim 1 の証明を完了した. \square

Claim 1 で存在の保証された covering \mathcal{F} の濃度を k で表すと, 各 $n < \omega$ に対し \aleph_n は正則基数なので,

$\aleph_\omega \leq k \leq \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ が証明される.

そして, $\lambda = (2^{\aleph_0})^{++}$ とおくと, \aleph_ω の強極限性より,

$2^\lambda < \aleph_\omega \leq k < \lambda$, 即ち, $2^\lambda < k < \lambda$ が成り立つ.

さらにこのとき, $[\mathcal{F}]^\lambda$ の部分集合 \mathcal{Y} で $|\mathcal{Y}| = k$ かつ $(\forall A \in [\mathcal{F}]^\lambda)(\exists B \in \mathcal{Y}) B \subseteq A$ を満たすものが存在する.

このことを一般的に証明しておく.

Claim 2 λ を任意の非可算正則基数, k を $2^\lambda \leq k < \lambda$ を満たす基数とするとき, $[k]^\lambda$ の部分集合 \mathcal{Y} で $|\mathcal{Y}| = k$ かつ $(\forall A \in [k]^\lambda)(\exists B \in \mathcal{Y}) B \subseteq A$ を満たすものが存在する.

Claim 2 の証明

k における超限帰納法によって証明する.

Case 1 $2^\lambda = k$ のとき.

$k^\lambda = (2^\lambda)^\lambda = 2^\lambda = k$ で $|[k]^\lambda| = k^\lambda = k$ となるので \mathcal{Y} として $[k]^\lambda$ 自身をとってよい.

Case 2 ある基数 $\nu < k$ に対し, $2^\lambda < k = \nu^+$ となるとき.

$2^\lambda \leq \nu < \aleph_\lambda$ が成立するので、帰納法の仮定より、
 $\nu \leq \alpha < k$ を満たす各順序数 α に対し、 $[\alpha]^\lambda$ の部分集合 y_α
 で $|y_\alpha| = \nu$ かつ $(\forall A \in [\alpha]^\lambda)(\exists B \in y_\alpha) B \subseteq A$ を満たすもの
 が存在する。ここで、 $y = \bigcup_{\nu \leq \alpha < k} y_\alpha$ とおくと、 y が求め
 られる $[k]^\lambda$ の部分集合となる。(例えば、 λ の正則性と
 $\lambda < k$ であることより、 $[k]^\lambda = \bigcup_{\nu \leq \alpha < k} [\alpha]^\lambda$ となる。)

Case 3 k が $2^\lambda < k < \aleph_\lambda$ を満たす極限基数であるとき。

$k < \aleph_\lambda$ より、ある極限順序数 $\alpha < \lambda$ に対し、 $k = \aleph_\alpha$ と
 なっている。今、 $\nu = \text{cf.}(k)$ とおくと、 $\nu = \text{cf.}(\alpha) \leq |\alpha| < \lambda$
 となる。 $\langle k_\xi : \xi < \nu \rangle$ を k において共終性をもった列で、 $k_0 = 0$
 $2^\lambda \leq k_1$ を満たすものとする。各 $\xi < \nu$ に対し、 $2^\lambda \leq k_{\xi+1} < \aleph_\lambda$
 で $k_{\xi+1} < k$ だから、帰納法の仮定を使って、 $[[k_\xi, k_{\xi+1}]]^\lambda$
 の部分集合 y_ξ で $|y_\xi| = k_{\xi+1}$ かつ

$(\forall A \in [[k_\xi, k_{\xi+1}]]^\lambda)(\exists B \in y_\xi) B \subseteq A$ を満たすものが存在
 する。ここで各 $\xi < \nu$ に対して、 $[[k_\xi, k_{\xi+1}]]$ は集合
 $\{\beta < k : k_\xi \leq \beta \leq k_{\xi+1}\}$ を表しているものとする。

$y = \bigcup_{\xi < \nu} y_\xi$ とおくと、 y が求める $[k]^\lambda$ の部分集合の
 条件を満たすものとなっている。

以上で Claim 2 の証明を終る。□

$a \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0}$ の任意の要素とする。

このとき、次のように超限列 $\langle \mathcal{M}_\alpha, f_\alpha : \alpha \in \text{Ord} \rangle$ を作ることが出来る。

- ① $\mathcal{M}_\alpha = \langle M_\alpha, \in, h_\alpha \rangle$ で $\mathcal{M}_\alpha < \mathcal{M}$, かつ $f_\alpha \in \mathcal{F}$;
- ② $a \cup \omega \subseteq M_\alpha$ かつ $|M_\alpha| \leq |\alpha| + \aleph_0$;
- ③ 各 $n < \omega$ に対し, $\chi_{\mathcal{M}_\alpha}(n) < \aleph_n$ ならば $\chi_{\mathcal{M}_\alpha}(n) < f_\alpha(n)$ である ;
- ④ $M_\alpha \cup \{f_\alpha(n), \chi_{\mathcal{M}_\alpha}(n) : n < \omega\} \subseteq M_{\alpha+1}$;
- ⑤ β が極限順序数ならば, 列 $\langle \mathcal{M}_\alpha : \alpha < \beta \rangle$ は初等鎖であって $\mathcal{M}_\beta = \bigcup_{\alpha < \beta} \mathcal{M}_\alpha$ である。

今, $\mathcal{M}^a = \mathcal{M}_\lambda$ かつ $F^a = \{f_\alpha : \alpha < \lambda\}$ とおく。

列の作り方より, 容易に次の事がらが証明される。

命題4 $(\forall n < \omega)(\aleph_n \leq \lambda \text{ ならば } \chi_{\mathcal{M}^a}(n) = \aleph_n)$.

命題5 $(\forall n < \omega)(\lambda < \aleph_n \text{ ならば } \chi_{\mathcal{M}^a}(n) < \aleph_n)$.

命題6 \mathcal{M}^a は good な \mathcal{M} の初等的部分構造である。

さらに, 次のことが成立する。

Claim 3 $|\{M^a : a \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0}\}| \leq k$. ここで,

各 $a \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0}$ に対し, $\mathcal{M}^a = \langle M^a, \in, h^a \rangle$ である。

Claim 3 の証明

各 $a \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0}$ に対し, $\lambda < \aleph_\omega$ なので, $|F^a| = \lambda$ とはり F^a は $[\mathcal{F}]^\lambda$ の要素となる。従って, ある \mathcal{F} の要素 A_a に対し

し $A_\alpha \subseteq F^a$ となる。今, $\mathcal{F} = \{A_\alpha : \alpha < k\}$ とし, $A_\alpha \subseteq F^a$ となる最小の順序数を $\alpha(a)$ で表すと, Claim 3 を証明するには, 各 $a, b \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0}$ に対し,

$\alpha(a) = \alpha(b)$ ならば $M^a = M^b$ を証明すれば十分である。

そこで $\alpha(a) = \alpha(b)$ と仮定することにする。先ず次の命題が成立するという事を注意する必要がある。

命題 7 $\mathcal{M} = \langle A, \epsilon, h_A \rangle$ が \mathcal{M} の初等的構造で, A の部分集合 B が $A \cap \aleph_{n+1}$ において共終性をもてば,

$A \cap \aleph_{n+1} = \text{Cl}_h(B \cup (A \cap \aleph_n)) \cap \aleph_{n+1}$ が成立する。

命題 8 $\mathcal{M} = \langle A, \epsilon, h_A \rangle$ と $\mathcal{N} = \langle B, \epsilon, h_B \rangle$ を二つの good な \mathcal{M} の初等的部分構造とするとき, $\chi_{\mathcal{M}} = \chi_{\mathcal{N}}$ ならば $A = B$ が成立する。

これらの命題より, $\chi_{\mathcal{M}^a} = \chi_{\mathcal{M}^b}$ を証明すれば, Claim 3 が証明出来たこととなる。

命題 4 より, 各 $n < \omega$ に対し, $\aleph_n \leq \lambda$ ならば $\chi_{\mathcal{M}^a}(n) = \aleph_n = \chi_{\mathcal{M}^b}(n)$ である。そこで, $n < \omega$ を $\aleph_n > \lambda$ を満たす任意な自然数とする。

このとき, $\chi_{\mathcal{M}^a}(n) < \aleph_n$, $\chi_{\mathcal{M}^b}(n) < \aleph_n$ (命題 5) だから, 二つの列 $\langle f_\alpha^a(n) : \alpha < \lambda \rangle$ と $\langle f_\alpha^b(n) : \alpha < \lambda \rangle$ は共に \aleph_n における単調増加列である。今, $\gamma = \alpha(a) = \alpha(b)$ とおき, $A_\gamma^n = \{f(n) : f \in A_\gamma\}$ とおくと, A_γ^n は

$\{f_\alpha^a(n) : \alpha < \lambda\} \cap \{f_\alpha^b(n) : \alpha < \lambda\}$ の部分集合で, $|A_\alpha^n| = \lambda$ である。従って, λ の正則性より,

$$\sup_{\alpha < \lambda} f_\alpha^a(n) = \sup_{\alpha < \lambda} A_\alpha^n = \sup_{\alpha < \lambda} f_\alpha^b(n) \quad \text{が成り立つ。}$$

これより, $\chi_{\mathcal{M}^a}(n) = \chi_{\mathcal{M}^b}(n)$ を示すには,

$$\chi_{\mathcal{M}^a}(n) = \sup_{\alpha < \lambda} f_\alpha^a(n) \quad \text{かつ} \quad \chi_{\mathcal{M}^b}(n) = \sup_{\alpha < \lambda} f_\alpha^b(n)$$

を言えばよいが, これは $\mathcal{M}^a, \mathcal{M}^b$ の作り方より明らかである。故に, $\chi_{\mathcal{M}^a} = \chi_{\mathcal{M}^b}$ が証明され, Claim 3 の証明が終了。□

\aleph_ω は強極限基数なので,

$$2^{\aleph_\omega} = 2^{\sum_{n < \omega} \aleph_n} = \prod_{n < \omega} 2^{\aleph_n} \leq \prod_{n < \omega} 2^{< \aleph_\omega} = (2^{< \aleph_\omega})^{\aleph_0} \leq \aleph_\omega^{\aleph_0} \leq 2^{\aleph_\omega}$$

より, $2^{\aleph_\omega} = \aleph_\omega^{\aleph_0}$ が成立する。

各 $a \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0}$ に対し, $|M^a| = |M_\lambda^a| \leq \lambda + \aleph_0 = \lambda$ で,

$$|[M^a]^{\aleph_0}| \leq \lambda^{\aleph_0} \leq 2^\lambda < k \quad \text{だから,}$$

$$2^{\aleph_\omega} = \aleph_\omega^{\aleph_0} = |[\aleph_\omega]^{\aleph_0}| \leq | \bigcup \{ [M^a]^{\aleph_0} : a \in [\aleph_\omega]^{\aleph_0} \} | \leq k \cdot k = k$$

より, $2^{\aleph_\omega} \leq k \leq \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ が成り立つ。

König の定理 1 より, $\text{cf.}(\aleph_{(2^{\aleph_0})^+}) = (2^{\aleph_0})^+ < \aleph_\omega < \text{cf.}(2^{\aleph_\omega})$

だから, $2^{\aleph_\omega} \neq \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ 。従って $2^{\aleph_\omega} < \aleph_{(2^{\aleph_0})^+}$ が成り立ち, 定理 10 の証明を終えることが出来る。□